

## 小-13

## 口腔内悪性黒色腫罹患犬の肺転移に対するリン酸トセラニブの効果の検討

○小幡善紀<sup>1)</sup> 丹羽昭博<sup>2)</sup> 手塚 光<sup>2)</sup> 遠藤能史<sup>1,2)</sup> 廉澤 剛<sup>1,2)</sup>

1) 酪農大伴侶動物医療学 2) 酪農大附属動物医療センター

【はじめに】犬の口腔腫瘍の発生率は腫瘍全体の6%であり、その中で悪性黒色腫の発生が最も多い。その挙動は生物学的にも悪く、高率に肺への遠隔転移を起こす。現在、犬の悪性黒色腫の肺転移病巣を高率に制御できる抗がん剤は報告されていないが、悪性黒色腫の一部に*C-KIT* 遺伝子変異が認められることや転移病巣の成長に血管新生が重要であることから、*KIT* 受容体のリン酸化阻害作用と血管新生阻害作用を有するリン酸トセラニブ（パラディア）は、有望な薬剤である。このため我々は、犬の口腔内悪性黒色腫で術後に肺転移が認められリン酸トセラニブを投与した症例を回視的に調査し、肺転移病巣に対する効果を検討した。

【材料および方法】2006年1月～2016年5月までに酪農学園大学附属動物医療センターに来院し、病理組織学的検査にて口腔内悪性黒色腫と診断され、術後に肺転移が確認されトセラニブを投与した犬6頭およびトセラニブを投与しなかった6頭計12頭を対象とした。リン酸トセラニブの用法・用量は2.5～2.9 mg/kg EODであった。投与後1カ月目に肺転移病巣をResponse Evaluation Criteria in Solid Tumors (RECIST) に従って評価し、リン酸トセラニブの転移病巣への効果について調査した。

【結果】リン酸トセラニブ投与群6症例中2例がSD、2例がPDで残り2例は評価材料が十分でなかったため評価できなかった。非投与群では、6症例中4例がPD、他2例は評価材料が十分でなかったため評価できなかった。リン酸トセラニブ投与群では肺転移が見つかったからの生存期間中央値が140日であった。トセラニブ非投与群では生存期間中央値は116日であった。

【考察】リン酸トセラニブ投与群と非投与群との間において生存期間に有意差 ( $P=0.495$ ) は認められなかったが、非投与群に比べ投与群ではSDが存在したことから、悪性黒色腫の肺転移病巣に対してリン酸トセラニブは若干の増殖抑制効果を有する可能性があると考えられた。

今回の検討では症例数が少ないことから、さらなる症例の集積と検討が必要であると考えられる。